

佳作 — 第一部門 —

アスペルガー症候群とともに



大阪府

近藤己順

二〇〇五年五月三十日は私にとって忘れられない日となった。アスペルガー症候群という名の障害が確定された日。それは今までの苦しみの答え合わせと同時に、新たな辛い日々の始まりでもあった。

私の小さい頃の記憶、それは殴られた日々だった。一年の四分の三は病気のうえ、人間関係がまともに行きなかった私は、親にとって許せない存在だった。殴られることは日常だった。それよりなにより私が辛かったのは、暴言の数々だった。

そして、私には理解できないことを言われた。

「普通になつて」

「お願いだから普通の子になつて」

毎日のようにいわれた。普通の子のように元気で遊んでほしい、普通の子のように友達と遊んでほしい。普通に話していることを理解してほしい。でも私にはできなかつた。その意味もわからなかつた。

学校へ行き始めた私は、さらなる地獄の日々が待っていた。小中高と連続した激しいいじめ。場の空気が読めない。話していることなどがすぐに理解ができない。普通に話ができない。なにかおかしい。人をイライラさせる要素と、いじめられても仕方ないと思われる行動、見事にいじめの標的となつた。ここでも殴られる、机につばが大量にはかかっている、万引きをさせられる。親は私にいった。

「いじめられるなんて情けない」

近所からの迫害もひどく、仲間はずれにされた。行き場がなかつた。居場所がなかつた。

私が自閉症ではないかという意見も周りからあつたらしい。しかし母親は

「うちの子はいつか普通になる」

「ちゃんとしつければいつか普通になつてくれる」

そう言つてかたくなに拒否をした。

後から母親は

「障害だつてわかつていればあんな事をしなかった。普通の学校にも行かざなかつた」

母親の言うこともわかる。頭の中ではすべて仕方がなく起こってしまったことなのだ。当時はアスペルガー症候群なんてほとんどの人が知らなかつたし、精神疾患でさえ今ほど公にされなかつた。そんな中で人とは違う子供を育てることはきつと辛いことだつたと思う。

しかし、虐待もいじめも、どんな理由があつても許されるべきではないと思う。やられている側に問題があることが、やつてもいい理由にはならない。いじめと言うものがどれだけ卑怯なことか、やっている人は考えてほしい。

虐待も、一生忘れられない傷となる。人間は、小さい頃愛されていたという貯金を持つて大人になるから、社会に出て辛いことがあつても頑張れる。その貯金がない人は、とても弱く、崩れやすい人間になつてしまう。

アスペルガー症候群を持った人ならそれはなおさらである。アスペルガー症候群は「忘れられない脳」がある。人間は辛いことを忘れるから、生きていけるのに、アスペルガーの人はそれができない。ずっと覚えている。だから、ずっと恨んでいる。

アスペルガー症候群のお子さんを持ったお母さんに私は必ず言う。人間関係がうまく行かない障害。生きていくだけでとても疲れる。辛いことも多い。だから、お子さんの支えになつてほしいと。お子

さんにとって楽しい思い出や愛されている思い出がたくさんできるようにしてあげてほしいと。親御さんもたいへんだと言うことを承知で、私は精一杯それを伝える。これから話すような、私のような状態になってほしくなかったからだ。

私が高校生に入った頃、親からの暴力はなくなったが代わりに過剰な期待をかけるようになっていった。中途半端に頭が良く、できることも多かったからだ。母は家の中の愚痴をすべて私に話していた。私はそれが苦痛だった。私に頼り切っている。私は頼る人がいないのに。

私は看護師になりたいという小さい頃からの夢を持っていた。その夢のためにいじめられても学校を辞めなかった。早く自立したい。人の役に立ちたい。バリバリ働きたい。そして、家を出たい。一生懸命勉強をして、寮のある看護学校に入った。やっと家から出られた。

看護学校は厳しく、寝る時間がほとんどなかった。要領が悪く、同時進行が苦手で、突然の変更が苦手だった。そんなのはおかまいなしに次々と課題が出てくる。それでも私はこなしていった。

しかしこのころから突然精神が病み始めた。今思えば二次障害が出てきたのだ。鬱^{うつ}、強迫神経症、パニック障害、過呼吸、あらゆる精神の疾患が出てきてしまった。と同時に、私の中で何かが壊れた。部屋の中で大暴れをするようになったり、奇声を上げたり、部屋のガラスを全部割ったり、自分で自分を傷つけて激しく流血をした。なぜか大事な友達にも嫌なことをたくさんしてしまった。フラッシュバックで昔のことを思いだして、悲鳴をあげながら夜中に目が覚め吐く毎日。「ずっと我慢して

たずつとずつと……」

それでも周りにおかしいと思われながらも、課題はこなしていった。

しかし実習という壁に大きくぶつかかった。担当の患者さんとコミュニケーションがとれなくて、レポートも書けなくて、向いてないといわれてしまい、留年した。それでも諦めきれずに一年生を二回やったけれど、どうしてもできなくて、挫折した。

落ち込むまもなく、実家に帰ってそこで、介護福祉士になるための学校に通ったが、そこでもトラブルは絶えず、精神状態はどんどんひどくなり、また、実習でだめになった。親はひどく嘆いた。

「なんであなたはできないの」

「おまえは逃げっぱなしやないか」

逃げた覚えはなかった。私はいつも限界までやっていたのに。

介護学校二年の途中で友人とのトラブルで暴力をふるい停学になった。そのとき親は初めて何かおかしいと思ったらしい。

停学二日目の時、パソコンに座っていた母が私に言った。

「あんた、アスペルガー症候群じゃないの？」

どんなものか見てみると、私のことが書いてあった。驚いた。どこの学校でもまともに習ったことがなかった。

すぐに発達障害支援センターに電話をして、診断してくれる病院を聞き、そこへ行った。生い立ちと、困っていることを全部紙に書き出し、それを医師に見せた。それからいろいろ質問された後私は医師に聞いた。

「私はアスペルガー症候群ですか？」

医師はまっすぐにこつちを向いた。

「そうです」

その後、母と医師だけが診察室に残り、私は外へ出た。母は医師に

「今まで大変でしたね」

と言われたらしい。そしてすぐに学校を辞めるようにと。

なんでもっと早く気がつかなかったんだろう。なんで誰も気づいてくれなかったんだろう。二十二年度の苦しみの答え。私は泣いた。

診断された後も困難にたくさんぶつかった。初めて知った自分の障害。しかしなんか自分ではできるような気がしてわけわからず行動をしていた。医師が止めるのも聞かずアルバイトを試みたが、すぐクビになった。人間関係もうまく行くような気がして、いろんな人に声をかけてみるけれど、トラブルばかりでうまくいかなかった。そんなことをしているうちに二次障害もまたどんどんひどくなっ

ていつて、とうとうまともに生活ができなくなるまで弱ってしまった。

医師の処方薬をきちんとのみ、合う薬を一生懸命探した。家でゆっくり休養をとった。思えば人生でこんなに休んだのはこの時が初めてだった。

それからやっといういろいろなことが考えられるようになってきた。自分にできることは限りがあること。頑張りすぎると脳が疲れて鬱になってしまうから、その前に無理をしないようにしなければならぬ。それから、定型の人たちと同じようにはできないんだと改めて理解をした。

それから長い間の迫害の影響は大きく、簡単に安定した精神状態になるのは無理だということも知った。これはものすごく大きな課題である。昔のことを恨む気持ちや、友人関係でうまくいかないことがあると、リストカットをしてしまったり、自殺をしようとしたりしてしまうことがあった。寂しくて、苦しくて泣いてばかりの時があった。母にこんなひどいことを言ったこともある。

「私はなんにも悪くないのにアスペルガーに生まれて、なんにも悪くないのに殴られて人格障害になって、なんでみんなの尻ぬぐいを私がこんなに頑張らなきゃいけないのよ。なんで私ばかり、私ばかり……」

私は自分の気持ちをコントロールする力が欠けていることを知った。特に怒りのコントロールができないことを知った。

療養して元気が出てきた頃、私はカウンセリングに通うようになった。趣味である声楽も習い始め

た。障害者職業センターで訓練を始めた。

HPやSNSなどで自分の気持ちを発信したり、時に、他の方の話を聞かせてもらうことも多くなった。つたないけれど、私なりに一生懸命ためになるコメントをしている。福祉の仕事を諦めた後も、人の役に立ちたいという気持ちは変わらず私にはあった。今後も発達障害の方の力になりたいと考えている。自助会を作ったりして、自分にできることを少しずつやっていこうと思っている。

無理をしないで、焦らないで、少しずつ、できることから始める。なかなかコントロールは難しい。これからもたくさんさんの困難に出会うだろう。また失敗をするかもしれない。それでも診断されてなかったころより確実に幸せに向かっていると信じて生きている。今までどんなことがあっても妥協せず頑張って生きてきた自分を信じて。今は大好きな母親と、周りの友人達を大切にしながら、これからも頑張っていきたい。

現在発達障害の人は十六人に一人ととても多いことがわかった。今まではこのような障害がわかっていなかったため、理由もわからずに苦しんだ人はたくさんいると思う。これから発見される子供達は、私たちと違って、良い環境で過ごせることを願っている。

定型発達の人がみんな楽しく生きているわけじゃないと言うことはわかっている。仕事もしなければいけないし、やはりふつうなりに求められることもとても多いと思う。きつともものすごく辛いこと

だろう。でもやりたくても、やれそうに見えても、できなくて苦しんでいる人もいるんだよって事を知ってほしいと思う。私たちは普通に生活していても定型の人の何倍も負担がかかっている。そういう人たちもいると言うことを覚えていてくれると嬉しい。

近藤 己順

昭和五十七年生まれ 大阪府羽曳野市在住

【受賞のことば】

このたびは佳作に選んでいただき、ありがとうございます。アスペルガー症候群のことを少しでも多くの人に知っていただきたいと思います。一生懸命書きました。なのでおどろきと喜びでいっぱいです。一〇〇人いれば一〇〇通りあるアスペルガー症候群の一例を読んでいただけたら嬉しいです。

選 評

幼少期から母親に虐待され続けるとは、何という過酷な成育歴かと、私は慄然とした。性格が粗暴と言ったことではない、アスペルガー症候群なのだと言断されたのは、何と二十二歳になってから。よくぞ生きてきましたね。心に深く刻まれた傷は容易に癒されるものではなからう。診断がついてからまだ二年。でも近藤さんは自分を見つめるもう一つの眼を持てるようになった。「母よ愛して」「この障害を知ってほしい」という叫びを広く人々に伝えたい。

(柳田 邦男)